

2021/09/05

ルカによる福音書 14 章 25-33 節

どんなに犠牲を伴ってもイエスに従う

14:25 さて、大ぜいの群衆が、イエスといっしょに歩いていましたが、イエスは彼らのほうに向いて言われた。14:26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。14:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。14:28 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちひとりでもあるでしょうか。14:29 基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、14:30 『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかつた』と言うでしょう。14:31 また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。14:32 もし見込みがなければ、敵がまだ遠くに離れている間に、使者を送って講和を求めましょう。14:33 そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

天秤があると想像してみてください。一方の皿にはキリストに従うという素晴らしい益があります。例えば洗礼や聖餐式、祈りが応えられること、罪の赦し、永遠のいのち、そして神の子として受け入れられるということです。もっと多くのことが挙げられますが、反対側の皿も見てみましょう。反対側には、イエスに従うことに伴う困難のすべてが乗せられます。あなたは何を乗せていますか？神の立法に心を留める必要があります。自分の時間を割いて教会に来なくてはなりません。信仰のゆえに迫害を受けるかもしれません。こちら側の皿にも、沢山のものが乗せられるのです。

実際のところ、ほとんどの説教者や多くのクリスチャンは、イエスに従うことの犠牲について強調したがりません。この世でイエスに従うことは容易なことのように見せたいと皆が思うのです。イエスはそのようには言われませんでした。

イエスは弟子になるとはどういう意味なのか何度も教えられ、そのたびに弟子になることは容易ではないと聴衆に印象付けました。ある箇所ではイエスは、実際にイエスに従って行く前に家族に別れを告げることができないと教えられました。またもう一つの箇所では、イエスの弟子になるためにはイエスの血を飲み、からだを食べなければならないと聴衆に教えました。イエスによれば、弟子となることは大変難しいことなのです。

今日の聖書箇所はもう一つのイエスの難しい教えです。表面的にみると、イエスが言っていることは荒々しく衝撃的です。このイエスの言葉をすぐさま素敵で礼儀正しく見せようとするべきではありません。イエスは、イエスに従った群衆にショックを与えようとしていたのです。しかし同時に、イエスに従うとはどういう意味なのかを弟子たちに教えようとしていました。イエスは、イエスに従うとは、十字架を負って、イエスについて行くことだと言われました。イエスの弟子になりた

いのであれば、自分のいのちさえも憎まなければならないと言われたのです。私たち皆が、これは度が過ぎると思うのではないのでしょうか。イエスの言葉から痛みを取り除くことなく、時間をかけてイエスが言われていることを理解し、私たちすべてが十字架によって型取られ、形づくられた人生に召されていることを理解したいと思います。

1. 犠牲を把握するよう警告される(28-32 節)

イエスに従うことが何を意味するのかを見る前に、どうしてそれが重要なのかを考える必要があります。「隣の芝生は青く見える」というのを聞いたことがあるでしょうか。これは、私が今から言うことに関係している有名なことわざです。意味は簡単です。自分が持っていないものを遠目で見てみると、自分が既に持っているものよりもよく見えるということです。牧草を食べる動物、たとえば牛は、自分のいる場所で一日中草を食べていますが、向こう側の草も同じ草なのにもかかわらずあちら側の草も食べようと首を柵に突っ込みます。当時イエスに従った人たちは、イエスの教えを、ファリサイ派や他の宗教的指導者たちの教えと比較していたのでしょうか。神の御国がくることについてのイエスの教えは魅力的でした。イエスは数匹の魚と少しのパンだけで 5000 人以上の人々を食べさせました。病人を癒し、悪霊を追い出しました。他の誰も持っていなかった知恵と権力で教えられました。ですから、人々はイエスの教えを聞いて、イエスの語るような人生が欲しいと思っていました。そこでイエスは、イエスに従うことは犠牲を伴うと彼らを警告したのですが、イエスが言っていることを説明すべく同時に 2 つの実践的例を示されました。

まずは、イエスに従う犠牲を考慮せずに従おうとする人はまるで、完成のために十分な費用があるかを計画せずに塔を築こうとする人のようだ、ということです。小さな町もしくは農場を守るため、質素な見張り塔か監視塔を築こうとしている人を想像してみます。この計画を始めたいという熱心さから、この人は労働者たちを雇い、費用を計算し始めます。すぐに基礎部分は出来上がり、最初の壁もできあがりそうですが、ここで問題が起こります。塔の一階部分相当のレンガしか持ち合わせていなかったのです。恐らく一番良いのは作業を諦めることでしょう。けれどもそれは恥ずべきことです。労働者は仕事を続け、できるところまでの作業はします。しかし、それでも結局は塔の半分しかできず、それが誰の目から見ても分かりあざ笑われるのです。

イエスの示された 2 つ目の例は、他の王と戦いに出ようとする王についてです。軍の策略を立てるべく、敵の兵の情報が王に伝えられます。王は、敵の兵がこちらの 2 倍であるということに気づきます。この報告を聞いて、王は行動計画を立てなければなりません。もしも勝てないと判断すれば、彼にできることは使者を送って講和条件を求めることだけです。もしも使者を送らなければ、それは自分の国をまるごと、そして自分の命さえも失うことを意味するかもしれません。この王も塔を築く者も、自分の計画にかかる費用・犠牲をしっかり検討しなければなりません。その仕事をするために必要なものは持っているか？その戦いは、塔建設は、その犠牲・費用に見合った利益をもたらすだろうか、と。イエスに従うことは、その犠牲に見合った価値があるのでしょうか？

2. すべてを捨てて、十字架を負いなさい (25-27&33 節)

14 章のこの前の部分では、イエスはファリサイ派と呼ばれた宗教的指導者たちを含む複数人と食事をしていました。イエスはそのすぐ前の安息日に男性を癒していたため、宗教的指導者たちはイエ

スに怒っていました。イエスはこの宗教的指導者たちと対峙し、神の御国の性質について教えられました。そこは貧しく乏しい者のための場所だけれども、あらゆる人たちが神の御国に来よう招待されているとイエスは言われました。ここでイエスは、「自分たちにふさわしい権利として神の御国に場所が与えられている」と思っていた宗教的指導者たちを厳しく責めています。

使徒ルカは、イエスが食卓を囲み食事をしながら教えられたその場面から、多くの群衆に取り囲まれる今日の場面へと場を移します。場面や聞いている人は変わっても、イエスはここでも神の御国について語っておられます。イエスはここでも、聴衆の間違った推測に対峙しておられます。テーマは、「誰が御国にあずかるか」ということから、その御国で「イエスに従うことの犠牲は何なのか」に向けられます。私たちは、誰が御国に招かれ、イエスに従うことの犠牲は何なのかということをご注意深く見てみなければなりません。あらゆる人が招かれるのです。特に、貧しく乏しい者です。けれども、彼らは何も手放すことなくただ宴会に来ることはできません。イエスは、誰でもイエスについて来たいものは、自分の父、母、配偶者、兄弟、姉妹、そして自分のいのちさえも憎まなければならないと言われました（26 節）。イエスの弟子になるために憎まなければならないとイエスが言われるなんて大変衝撃的です。イエスに従う者は、敵をも愛し、彼らのために祈らなければならないと教えられたのは他でもないイエスです。けれどもこのルカ 14 章でイエスは、私たちの家族を憎まなければならないと言われているのです。憎むとはとても強い言葉で、イエスは効果的にこれを用いています。憎しみの反対は愛ですよね。ですから、イエスが言われているように父も、母も、姉妹も兄弟も、自分のいのちさえも憎むということは、イエスはその代わりに何を愛さなければならないと言われているのでしょうか。自分や家族よりも誰を愛すべきなのか、ルカ 14 章では明確には教えられていませんが、マタイ 10 章 37 節にある同様の教えから、誰を愛すべきなのかが分かります。

マタイ 10:37 「10:37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」

この 2 つの聖書箇所を並べて読んでみると、イエスが家族や自分自身をも憎みなさいと弟子たちに言われたことのイメージが見えてきます。

マタイ 10:37 「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」

ルカ 14:26 「わたしのもとに来て、自分の父、母……（を）憎まない者は……」

イエスは、はっきりと対照的に見せているのです。つまり、イエスを愛する非常に大きな愛と比べれば、まるで父や母を憎むかのようだという事です。イエスを愛するという事はそんなに難しく聞こえませんが、家族を憎むかのようにイエスを愛するというのは考えるにも難しいことです。先ほどの天秤を思い出してください。イエスに従う益についてもう一度考えましょう。永遠のいのち、罪の赦しは驚くべき賜物ですが、こういった賜物は、家族を憎むかのようにイエスを非常に愛するほど価値があるものでしょうか？これについてももう少し考えてみましょう。

「たいせつな戒め」を覚えておられますか。イエスは、心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くし

て神を愛せよ、それがたいせつな第一の戒めであると言われました。「尽くして」という部分が、これを難しくしています。本当に「～し尽くす」には何をしたらいいのでしょうか。

イエスは、私たちの全身全霊で神を愛さなければならないと言われました。私たちのすべてをもって神を愛するというこの戒めと比較すれば、愛を伴う他のどんな召しも、三位一体の神に対する愛に及ぶことはありません。「私たちのすべてをもって神を愛する」ということを理解するためのもう一つのポイントは、愛とは何なのかを理解することです。

神を愛するということは、ロマンチックな愛とは違います。従順と献身という言葉で表現される愛です。もしくは忠誠と言う言葉でも説明できるでしょう。神を愛するということは、神に完全に忠実であるということです。神の戒めに従うことにあって、神の栄光とほまれを求めることにあってです。イエスへの愛と比べれば父や母を憎むほどの人は、完全に神の戒めに自らをささげ、父や母の戒めでさえもその人の注意をひくことはできません。忠誠という点から愛と憎しみを考えることができれば、他の人がどう評価するかに関わらずイエスはあなたの完全なる忠誠を獲得なさるので、けれども、イエスは 26 節でイエスの弟子となることは、十字架を負うことであると付け加えて言葉を強め、27 節と 33 節では全ての財産を捨てることも加えました。

14:26 「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。

14:27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。

14:33 そういふわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

十字架を負うということは、死にまでさえもイエスに従うという真の召しです。ルカの福音書を見てみると、イエスの道はエルサレムと十字架で終わりました。私たち信者にとってもそれは同じです。何よりもまず自分に対して死に、そして自分で救い主になろうと握りしめる自分の計画に対して死ぬのです。この世のもので私たちが満足することはありません。それは、私たちがキリストの栄光を見たからです。富や誉れ、普通の生活でさえも、私たちが本当に必要なものを与えることはありません。それを全て捨てるのです。その代わりに、イエスの御名を掲げ、イエスの栄光のために生きるのです。

イエスに従うことの犠牲について話してきました。それは、神への従順や忠誠を囲うようにして自分の人生のすべてを作り直すということです。イエスは聴衆に容易なことのように教えませんでした。今や皆さんは、クリスチャンであることはあらゆる面で犠牲が多いことだと言われるでしょう。機会が失われ、馬鹿にされ、時には身体的害を受けるかもしれません。けれどもこのような経験を通して、イエスに従って十字架を負えば、救い主の足跡を追うことができるということが皆さんにも見えてくるよう、祈ります。

けれども今日の時間は、イエスにすべてをお捧げするというもっと深い真理に目を留めて終わらしましょう。愛と憎しみは両極端にあるもののように思えます。実際に、通常はそうです。もしも私が何かを憎んでいたとすれば、普通はそれを避けようとするか、壊そうとするでしょう。ですが、学

んできたように、イエスは愛と憎しみを使って比較しているだけで、私たちは家族を憎むように命じられているのではないのです。私たちは、私たちのすべての忠誠をイエスが得るべく、イエスを深く愛するように召されているのです。それがたとえ私たちの周囲の人の思いに反するとしても、私たちはイエスに従うのです。では、イエスへの完全な献身と忠誠は人生に何をもたらすのでしょうか？先述したように、それは、神の命令への従順とすべてのことにおいて神の栄光を求めることに繋がります。ですから実際には、二番目にたいせつな戒めと呼ばれる「隣人を自分のように愛せよ」という戒めにも従うことになるのです。つまり、父も、母も敬うこととなります。自分よりも難しい環境にある人にお仕えすることになります。真理を述べ伝え、そしてすべての人が神の似姿に造られたと覚えて人と接することになります。父と母、姉妹、兄弟、自分のいのちさえも憎むとは荒々しく聞こえます。すべての財産を捨てて十字架を負うこともそうです。けれども、私たちの愛する神は天にあるすべての霊的祝福をくださり、私たちがこの世で最も愛おしむべき人になるよう召されているのです。

クリスチャン神学やクリスチャン倫理について考えることに時間を取ってみてください。聖書の教えや教会は、私たちが持っているものの価値に、より深い意味を与えてくれます。例えば、先祖から代々その意思を受け継いだから、というので両親を敬うのでは、あまりそれを行う良い理由になりません。伝統に従うことに気持ちを向けることもあるかもしれませんが。けれども、両親を敬うのは、神が家族を造ってくださり、子どもたちは主にあって両親を敬うべきであると命じられているからという理由は私たちにもっと崇高な目的を与えてくれます。真実を述べることにおいても、神がいつも真実を述べられるからという理由で価値あるものとなります。私たちが話す真実が、たとえ私たちにとって利益がないことだったとしても、それは素晴らしい真実なのです。私たちの父である神は、決して嘘をつかないお方だからです。私たちが神への愛を第一にすれば、人生において他のものすべてがもっと価値あるものになります。すべてのものが尊いものとなるのです。季節の変化を楽しんだり、大好きな食べ物を味わったり、家族や仕事を愛することができます。それは、こういったことを楽しむことで、神の内に隠れるより素晴らしいものに目を向けているからです。神をまず愛することで他の者に対する愛が増すということは直感的に考えると反対にも思えます。真の敬虔とは、他のものの価値を下げるのではなく、より美しく価値あるものにするものです。

三位一体の神に私たちを完全にお捧げしなければなりません。それにはなんらかの犠牲が伴うものです。また悔い改めも必要です。自分だけではなく他の人の益も求める必要があります。私たちの経歴や家族に対する優先順序が再検討されることでしょう。その他にもたくさんの方が変わり、諦めることも出てくるでしょう。しかし、弟子になることの犠牲に目を留めるようにイエスが言われたことには意味があります。私たちが家族、仕事、もしくは自分のいのちを失った時、イエスに関わることに価値が無いと言ってしまふ誘惑にかられるかもしれません。私たちがクリスチャンだと周囲の人が知らなかったら良かったと思うかもしれません。けれども、イエス様が逮捕されたときのペトロを思い起こしましょう。ペテロは何度も何度も、イエスの信者かと聞かれてそれを三度否定しました。なぜイエスを否定したのでしょうか？ペテロはイエス様が行ったすべてのしるしを目にしました。イエスと一緒に水の上を歩きました。けれども、イエスの信者であると言ったらどうなるかと恐れてしまったのです。しかし復活のキリストを目にして、そして内に住まれる聖霊様を受けてからは、残りの人生をイエスの福音を大胆に語ることに費やしました。

その変化は、次の 2 つの結果であると思います。まずペテロはキリストの内にある神の御力を見て信じたということ、そして 2 つ目にその神の力と、イエスが逮捕された夜に経験した恐れとを比較したことです。神の御力と人間の力など比較することさえできないほどなのです。

神の栄光よりも崇高で素晴らしいものはありません。イエスがルカ 14 章 15-33 節で犠牲に目を留めるよう聴衆に促されたように、私も皆さんに、イエスに従うことの犠牲に目を留めるよう勧めたいと思います。イエスに従うことは容易ではなく、また人生における問題を早急に解決してくれるわけでもないでしょう。あなたにとって、家族、経歴、自分のいのちまで犠牲になることかもしれません。困難や苦難に立ち向かおうとする気持ちがありますか？十字架にかたどられた人生を送りたいと思いますか？犠牲に目を留めることは問題に目を向けることではなく、神から受けるより深い信仰、望み、そして愛に目を向けることです。神の御言葉に基づいて互いに仕えながら生きることができるより良い者へと十字架が変えてくださることに目を向けるのです。犠牲に目を向けてみましょう。イエスに従うことに価値がありますか？